

- 5) 浮田和民「新亜細亜主義（東洋モンロー主義の新解釈）」、『太陽』24 - 9, 1918年6月27日。
- 6) 孫文「東亜に於ける日支両国の関係を論ず」、『支那』4 - 5, 1913年3月。
- 7) 「在阪の孫逸仙氏」、『大阪朝日新聞』, 1913年3月13日。
- 8) 孫文「中国存亡問題」(1917年2～5月), 邦訳, 伊地智善継・山口一郎編『孫文選集』3, 社会思想社, 1982年。
- 9) 孫文「与日本記者大江的談話」(1919年4月), 陳旭麓・郝盛潮主編『孫中山集外集』, 上海人民出版社, 1990年。
- 10) 朱文通他編『李大釗全集』1, 河北人民出版社, 石家莊, 1999年, 所収。
- 11) 李大釗「極東們羅主義」(1917年2月21日), 『李大釗全集』2。
- 12) 李大釗「大亜細亜主義」(1917年4月18日), 同上。
- 13) 李大釗「Pan··ism之失敗与 Democracy之勝利」(1918年7月15日), 『李大釗全集』3。
- 14) 李大釗「大亜細亜主義与新亜細亜主義」(1919年2月1日), 邦訳, 小島晋治・伊東昭雄ほか『中国人の日本人観一〇〇年史』, 自由国民社, 1974年。
- 15) 李大釗「再論新亜細亜主義（答高承元君）」(1919年11月1日), 『李大釗全集』3。

〈社会 I〉 中国女性と第一次世界大戦

須藤 瑞代

本報告は、第一次世界大戦が、中国の女性たちにどのようにつたえられていたのかを、『婦女雑誌』（商務印書館、1915～1931年）の記事を中心に史料として分析した。

『婦女雑誌』の大戦報道記事の特徴は、①翻訳記事が多いこと、②写真、図版を多用していること、③欧米女性の戦時活動に高い関心があることがあげられる。①、②は同じ商務印書館から刊行されていた『東方雑誌』の特徴として指摘されている点と一致する¹⁾。

第一の特徴の、翻訳記事が多いことについては、第一次世界大戦を主題として取り上げた『婦女雑誌』の記事50篇のうち、少なくとも23篇

は外国の雑誌・書籍からの翻訳・転載である。これら以外にも、出典が明記されていなくても翻訳と考えられるものも存在するため、翻訳記事の割合がかなり多いことが指摘できる。

第二の特徴は、写真・図版の使用が多いことである。赤十字の女性たち、欧州の戦場で活躍する救助犬とその犬を訓練したイギリス人女性の写真や、砲弾の薬莖を製造するフランスの女工の写真など、多種多様な写真が掲載されており、欧米女性の活動が視覚的に理解できるよう工夫されていた。

第三の特徴は、第一次世界大戦に関連する女性の活動に注目があつまっていたことである。とりわけイギリスに関する記事が多く、出征した男性に代わって女性たちが電車の車掌、自動車の運転手などの職業につき、軍需工場でも女性が武器の製造に携わって祖国に貢献していることなどが、賞讃を込めて報道されている。また、女性に「ふさわしい」活動として、イギリスではナイチンゲール以来の伝統があった看護についても、野戦病院での看護活動、や赤十字の活動などが紹介されている。さらに、英国王室のメアリー王妃とメアリー王女の記事もみられ、メアリー王女が赤十字の服装をしている写真つきの記事もあった。

以上見てきたように、『婦女雑誌』に書かれた記事の焦点は、イギリス女性の優れた活動や愛国心にあるといえるだろう。しかしながら、ここで「書かれなかったもの」もまた重要と考えられる。『婦女雑誌』の記事には、本国イギリスでは大々的に報道されていたいくつかの「問題」が、取り上げられていなかった。

まず、女性の社会進出は、過酷な労働となる場合も数多くあった²⁾。たとえば、工場労働では、TNT火薬を使った爆弾製造にかかわった女性たちには中毒になったものも多かった。また、陸軍女性補助部隊が組織されると(最盛期で5万人を超える女性が登録)、女性が制服を身につけること、行進を行ったり敬礼をしたりすることに対して、「国王の制服の価値を貶める」と新聞に批判の投書が殺到していた。看護をめぐることも、第一次世界大戦では近代兵器が大量に投入されたため、いままでにないような悲惨な状態の負傷兵に対応しなくてはならなかったこと、また、訓練を受けたトレインド・ナースとVADとよばれた篤志看護婦(篤志救護部隊 Voluntary Aid Detachments)の階級間の軋轢などもあったが³⁾、『婦

女雑誌』にはそれらに関する言及はない。

また、イギリスでは1915年の「イーディス・カヴェル (Edith Cavell) 事件」が連日大々的に報道されていた。カヴェルはイギリス人看護師で、看護学校の校長となるためにベルギーへ渡り、大戦が勃発してドイツ軍によってブリュッセルが陥落したあともそこにとどまり、負傷した対独レジスタンスの兵士をかくまい、200人を国境から逃がすなどの協力活動を行った。そのため、ドイツ秘密警察に逮捕され、1915年10月に反逆罪で処刑された。この事件は、イギリスでは多くの新聞にセンセーショナルに報道され、処刑シーンを描いた絵はがきなども大量に発行された。しかし、中国の『婦女雑誌』では事件についての関心はみられない。

さらに、国をあげての戦争熱に盛り上がった少女たちが、制服を着た兵士たちのあとを追いかけて陸軍キャンプにまで押しかけてしまうなどの現象にも『婦女雑誌』には言及がない。また、イギリスは大戦前女性参政権獲得運動が盛んであったが、開戦後、女性参政権獲得運動の団体は、全国的な愛国心の高揚の中で公然と反体制運動を繰り広げるのは得策ではなく、また戦争協力と引き替えに参政権を得られるかもしれないという思惑から、相次いで女性参政権運動の休止を宣言していた。こうした女性参政権運動の休止についても、関心を引いた形跡はない。

このようにみえてくると、『婦女雑誌』の大戦報道については掲載する記事に取捨選択が行われていたことが明かである。最も報道の多かったイギリスについての記事を見ると、その焦点はイギリスの女性がいかにして大戦に貢献したかにあり、プラスの側面、すなわち女性が男性の代わりに仕事につくなどの貢献をしたこと、運転手など新しい役割を果たしたことなどに注目が集まっていた。マイナスの側面、つまり戦争の悲惨な状況や女性に対する批判や模範にならない状況については取り上げていなかったのである。これは、イギリスのみならず、他の欧米諸国（アメリカ・フランス・ドイツなど）の女性に関する記事にも同様の傾向が見られた。

また、『婦女雑誌』の翻訳記事の来源は、ほとんどが欧米の雑誌・書籍で、新聞からの翻訳・転載は管見の限り一つもなかった。イギリスなどでは、新聞にセンセーショナルな記事が出ることが多かったのだが、それは採用せず、意図的に雑誌の穏健な記事を選択した可能性が指摘で

きる。

翻訳記事の中で特筆すべきは、日本語著作の『欧洲戦と交戦各国婦人』(臨時軍事調査委員編、1917年)の連載である。臨時軍事調査委員は1915年に陸軍省に設置され、第一次世界大戦の兵器や戦略から国家総動員にいたるまでのさまざまな調査を行っており、女性に対する調査もその一環であった。

同書の内容は、①イギリス、フランス、ロシア、ドイツの女性の状況の概括、②女性の軍隊援助：軍隊の慰問、傷病兵の看護、恤兵品の寄贈などについて、③女性による軍人の家族・貧窮者の救護・慰問、寄附金などの寄贈と募集について、④男子の職業に代わって活動する婦人：農業・工業・陸軍補助・教員その他について、⑤婦人団体の活動、女性の直接戦闘参与などについてであった。それぞれ非常に簡潔で要を得た記述が見られ、実際に日本が総動員体制になったときの一種のマニュアルとして役立つことも想定されていると考えられる。

「緒言」では、「現今の戦争は、実に国家の全力を要求し、殊に一国の男子にして兵役に堪えふるものは悉く武装して軍役に従ふ。是に於てか国内に残留せる婦人の任務は、一層重大を見るに至れり。〔中略〕交戦各国婦人の活動蓋し所以なきにあらざるなり」と述べられている。ここからも、「総力戦」の中での欧米女性の活動の重要性が認識されており、日本女性の活動の参考にすることが念頭にあったことがわかる。

この『欧洲戦と交戦各国婦人』は日本で1917年に出版され、このほぼ全訳が1918年に『婦女雑誌』に9回にわたって連載された。冒頭の写真がカットされたほかは、表なども含めてほぼすべて翻訳されている。これは、「総力戦」の中での欧米女性の活動に関する簡潔な記述が中国にも有用と考えられたためと考えられる。この連載中に大戦は終了しており、結果的にこれが第一次世界大戦の女性の活動を総括するものとなった。

以上見てきた『婦女雑誌』の第一次世界大戦報道の意義は、次の二つにまとめられる。一つは、女性の貢献／新しい役割に注目が集まったことである。同じ商務印書館の『東方雑誌』には、「科学・技術への高い関心」が見られたが、『婦女雑誌』にはそうした関心はなく、そのかわりにモデルとしての女性の活動が紹介されていた。目を引く新奇なも

の／中国も取り入れ可能なものという意味では、「科学・技術への高い関心」と共通する側面ともいえるだろう。ただし、『東方雑誌』では、西洋＝科学＝戦争に対する否定的見方もあったことが指摘されているが、『婦女雑誌』では西洋批判にはならず、戦争に対する否定的見方は表れなかった。

もう一つは欧米各国女性に対する見方の変化につながったことである。総力戦に貢献する欧米の女性たちの姿が紹介されたことは、欧米女性への関心を高めることとなった。欧米女性への関心が高まる一方で、逆に総力戦体制になっていない日本女性への関心は比較的低かった。さらに1920年代になると、日本女性は、失恋などによる自殺が多く、家庭内で抑圧されているなどといった「新旧思想のはざままで苦悩」しており、欧米の女性と比較するとまだまだ劣っているといった記事が多くなる⁴⁾。日本語著作は新思想受容の重要なソースであり、大量に翻訳記事が掲載されているにもかかわらず、一般の日本女性への評価はかなり低かったのである。こうした日本も含めた世界各国の女性に対する見方の形成にも、第一次世界大戦中の女性についての報道は大きく関わっているのではないかと考えられる。

[参考文献]

- 1) 『東方雑誌』の第一次世界大戦報道については、小野寺史郎「欧州戦争と科学振興のジレンマ——中国における第一次世界大戦報道とその思想的影響」(『東洋史研究』第75巻第4号, 2017年, 109-131頁)。
- 2) 第一次世界大戦期のイギリス女性については、林田敏子『戦う女、戦えない女——第一次世界大戦期のジェンダーとセクシュアリティ』(人文書院, 2003年)。
- 3) 第一次世界大戦期の看護については、荒木映子『ナイチンゲールの末裔たち——〈看護〉から読みなおす第一次世界大戦』(岩波書店, 2014年)。
- 4) 『婦女雑誌』の日本女性観については、須藤瑞代「『婦女雑誌』と日本女性——近代東アジアにおける「同じ女」の意味とは」(村田雄二郎編『婦女雑誌』からみる近代中国女性』, 研文出版, 2005年, 307-333頁)。